

<書評 I>

岩佐和幸 監訳

『資本主義的グローバリゼーション』

影響・抵抗・オルタナティブ』

(高菅出版、2015 年)

金佑榮

グローバリゼーションとは、明確に何であり、それは、新自由主義、あるいは、資本主義とどのように結びついているのだろうか。

なぜ、全世界の労働者たちは、失業や実質賃金の下落をはじめとする他の経済的困難による痛みを感じているのか。我々は、どのようにして、資本主義的グローバリゼーションに抵抗でき、公共の利益をもたらす発展へと転換することが可能であろうか。

こういったことが、本書における著者の主な問題意識であり、本書は、それに対する説得力のある答えを提出している。

1970 年代以降、世界は、貿易に対するすべての障壁を取り除くという‘自由貿易’に熱中してきた。「自由貿易イデオロギー」は、我々に、大きな富をもたらしてくれると約束していたが、それは、全く実現されず、富のほとんどは、たった 1% に過ぎない支配階級へと集中した。

第 1 部で、著者は、国境を超えた生産ネットワークという視点から議論を展開し、その生産ネットワークの拡大について説明している。特に、消費財の完成品をある国で一括して生産するのではなく、多様な国からの構成品を組み立てるという構造（最終組み立てのための中間財も含む）が、ますます広がっていると分析している。また、こうしたプロセスの暴走を進行させた主役として、多国籍企業を上げている。

著者によると、1970 年代に入ってから、世界経済は、多国籍企業によって支配されてきた。また、貿易における国際的な仕組みの構築は、決して、自然発生的なものではなく、関税障壁を取り除く様々な国際協定の結果であると述べている。このような様々な国際協定によって、国境を超える資本の流れがより自由になり、「超国境的生産ネットワーク」作りの結果の一つとして、世界経済のなかで、東アジア、特に、中国が浮上したと把握している。

著者は、世界のなかで、この地域に焦点を当て、中国におけるこれまでの経済的発展は、グローバル資本主義そのものの需要であり、中国という国家における発展の必要性ではないと捉えている。同様に、グローバル資本主義のために、東アジア諸国は、輸出向け生産に大きく傾倒し、それは、個別国家の内部需要ではなく、世界先進国のニーズに対応するためであったと説明している。また、そのなかで、開発途上国における経済的発展は、巨大な世界市場とそれを支配する多国籍企業の需要によって等閑視されてきたと分析している。

第 2 部では、まず、自由貿易とその優越性の神話について取り扱っている。そのなかで、著者は、自由貿易政策に対する知的な妥当性を提供する重要な役割を果たしている比較優位理論は、非現実的な仮定（完全競争市場、労働力と資本は、国境を越えて移動しない、市場での価格は、常に生産における実質社会的費用の影響を反映する）に基づいたものであると批判している。

明らかに、こういった状況は、現実には不可能であるにもかかわらず、資本は、これまでの数十年間、新自由主義と結びつきながら、国境を越える自由な移動に向けて、その障壁を取り除くため動いている。こういった資本の動きが与えた影響について、著者は、次のように述べている。

新自由主義時代は、それ以前の時代に比べて、中・低所得国家における多数の大衆のための経済的成長を遅らせ、社会的指標の向上を妨げた。また、新自由主義は、永遠な成長への需要に基づいたシステムであるため、これ自体が致命的な弱点を持つ。

さらに、貿易自由化は、多くの第三世界における産業空洞化をもたらした。また、国際通貨基金と世界銀行からの圧力の下で、第三世界の多くの国が、社会的プログラムの縮小などを強要され、国際的投資家の利益のため、経済を民営化したり、規制を撤廃したりした。

中国は、グローバリゼーションの成功事例のように見えるが、著者は、それは一側面だけの成功であると指摘している。というのは、発展の多くの部分が、中国の内部のためのものではなく、グローバル市場の発展のためであった。しかも、中国の経済成長で利益を得たものは、数字上、相対的に少ない高所得層であり、大半の中国の労働者は、自国の経済成長から、大きな恵みを受けられなかったからであ

る。

次に、著者は、資本主義的世界システムとその力動性に関する説明に取り組んでいる。その力動性とは、単なる新自由主義ではなく、常に挑戦され、乗り越えていく資本主義そのものの本質に関することであると主張している。

特に、資本主義的グローバリゼーションの浮上は、1980年代における第三世界の金融危機と同様に、先進国のなかでの経済的不安定の結果であり、国際的な生産の可能性やグローバリゼーションの発展に大きく寄与した要素であると説明している。

そして、アメリカと韓国間の自由貿易協定(FTA)についても論じている。著者は、こういった協定が資本主義的グローバリゼーションをより拡大させる役割を果たしていると強調しながらも、そのような協定に対する抵抗は、資本主義への挑戦であり、それを乗り越えるための闘争において、重要な部分でもあると述べている。

本書は、単純にグローバリゼーションとは何なのかを分析したものではない。むしろ、‘これから何をするべきか’といったより運動論的で、実践的な活動に対する議論の土台を提供している。特に、第2部の最後の章では、1999年11月にシアトルで行われたWTO閣僚会議の決裂をもたらしたデモがきっかけで生み出された、新たな闘争について描かれている。とりわけ、政治的焦点や組織の取り組みは、アメリカ、及び他の国における労働者問題に対し、直接的に関与できるキャンペーンの開発に集中するべきであり、労働者の国際的な連携を強化するべきであると述べている。その連携を促進する方法として、著者は、アメリカにおけるメーデーの伝統の活性化を支持している。

第3部では、著者は、資本主義的グローバリゼーションに抵抗する対案として、ラテンアメリカ地域の左派政府による‘協同的開発’プログラムに注目している。特に、国家的発展に向けたALBA(米州ボリビア同盟)と南の銀行の投資の潜在的要素に焦点を当てている。たとえば、ALBAと南の銀行が反資本主義的政策課題を明示的に設定していなくとも、この二つの組織は、多国籍企業と先進国の支配階級の利益を代弁するプロジェクトに対するオルタナティブを提供すると評価している。

本書は、経済的グローバリゼーションと生産の国際化といった全地球的現象を把握することに有効で

ある。こういった意味では、資本主義とグローバリゼーション、そのイデオロギーとしての新自由主義を論じる際に、理論的ではないものの、より実的なものであると考えられる。また、著者は、資本主義的グローバリゼーションへの挑戦に取り組んでいるすべての人々に有用な資料の提供・生産を目的にしており、本書は、ある程度との成果を達成しているといっても良いだろう。

著書全体のなかで、最も興味の深いところは、読者によってそれぞれ異なるものの、議論になり得る最大の部分は、やはり、著者がオルタナティブとして提案した、ALBAと南の銀行の取り組みであろう。

彼自身も6つの教訓において、課題として指摘しているが、この二つの組織の取り組みは、あまりにも国家中心である点をここでも強調しておこう。結局のところ、我々は、資本主義を超えるための社会変革に対して、国家への依存、つまり、「国家的調整」を認めざるをえないのかという疑問をめぐいきれない。こういった観点から見れば、ALBAと南の銀行の取り組みが真の意味でのオルタナティブとしてより堅固な説得力を発揮するためには、加盟国の各国内部ごとでの市民社会との連携(地域的視点からのボトムアップ型)の模索やその過程をより明らかにする必要があると考えられる。

そして、よりマクロ的視点から、ALBAと南の銀行の取り組みが、資本主義的グローバリゼーションに抵抗するオルタナティブとして機能する具体的なメカニズムについて論じることも重要であると考えられる。

本書全体の結論として、著者の現状分析やオルタナティブとして提案した二つの組織が、実際に、これからの社会変革の過程のなかで、どのように作用し、どのような未来の姿(資本主義を超えられる)を描き、創り出せるのかという青写真の提示まで望むことは、読者として過渡な望みであろうか。

ともあれ、本書には、我々が活用できる有用な情報があふれている。さらに、資本主義へ対抗する成功的実践の構築のためにも役に立つ。

何よりも、著者は、彼自身の熱情と国際的自由貿易によって破壊された人々を救いたいといった自身の願望を十分に示している点では、資本主義的グローバリゼーションに対抗するすべての実践家のための指針書であるといっても過言ではない。

(京都大学大学院経済学研究科、博士後期課程)